

女中が新吉の聲丈を聞いて七十位の爺さんだと思つたと言つた。

床の中に這入つてねてゐると加藤一夫が後から來た。

彼は肺病でも血色が好い、色女に關した話を一しきり二人がしてゐた。

新吉はねたふりをして聞いてゐたが、あまりに色情狂を昂奮さす様な話をするので起き上つた。

糞面白くもねえ。

ボルセビキが益徳正損だとか、カツレッツの上へソースを流すのが革命だとか言つてやれば、彼等は喜ぶ。

翌朝何時かの糸崎行きに乗つた。

刑事が一人追いて來てゐる。新吉に名刺を呉れた。

六高の學生が三四人一緒なので密柑や辨當を買つて呉れた。

新吉はうらぶれた心持であつた。

刺戟に堪えられなかつた。